

2014国際教養科NEWS 10月(3)

平和人権教育講演会 グローバル人材育成語り部事業

東京外国語大学 伊勢崎賢治先生講演会 10/10(金)

東京外国語大学総合国際学研究院（国際社会部門・国際研究系）教授伊勢崎賢治先生に講師をお願いし、「今、高校生に伝えたいこと」という演題で、講演会を行いました。今回の講演会は、国際教養科特別授業②であると同時に、全校生徒対象の平和人権教育として位置づけて行いました。伊勢崎先生には、5年前にも本校でご講演をいただいたこともあり、あこがれの大学の先生による直接のご講演は大きな刺激となりました。今回のご講演を通じて一人ひとりが、これまで以上に世界の情勢や平和人権について意識を持つようになり、学ぶことの面白さを感じ取ってくれたようです。



「シエラレオネ」という国名を初めて聞きました。ダイヤモンドがたくさんとれる、国力のランキングではシエラレオネは最も貧しい国という両面性があることを知りました。ダイヤモンドが密輸されているという問題があり、密輸されているダイヤモンドを買っている私たちも戦争に荷担しているのではないかと先生はおっしゃっていました。ダイヤモンドや普段使っている携帯電話の原料はどこで採れたものなのか調べてみたいです。また、アフリカの子供達の命を奪う3つの「殺人病」を知りました。HIVとマラリア

の2つの病気はわかったけど、3つめはわかりませんでした。下痢というのは、私達にとったら大病ではないけれど、アフリカの子供達にとったら、とても大変な病気と言うことがわかりました。私が先生のお話の中で1番印象に残っているのは「シエラレオネで起きた革命」についてです。どうして革命が起きてしまったのだろうと思いました。シエラレオネの政治家などの1部の人自分さえ良ければと、ダイヤモンドの密輸に手を貸していたのです。革命は、宗教、部族間の争いではなく、腐敗した国をどうにかしようとして起きたものということは知っていました。だけど、「革命が人民を殺し始めた」という言葉を聞いてとても驚きました。「どういうこと？人民のために革命が起きたのではないの？」と驚いたと同時に思いました。その後10年間続いた革命で50万人、8人に1人の人が亡くなってしまったということを知り、長期化した革命は人民を殺してしまうということは恐ろしいと感じました。ゲリラの人たちは、政府の軍事組織ではないため資金や食料がない→住民から奪う→どんどん貧しくなる→渡すものが無くなる→人民を殺してしまうという負のスパイラルが起きてしまったこともわかりました。「子供兵」という言葉は聞いたことがあったけれど詳しくは知りませんでした。1番小さい司令官の子は14歳というのを知り、私よりも小さな子供が学校にも行くことができず戦わされていて、自分が学校に行くことができるのは当たり前ではないのだと強く思いました。（国際教養科1年）



今回の講演で、平和を構築する上で大切なポイントが新たな面から知れました。今まで僕は、世界に友達を作ること、平和になると本気で考えてきました。「No war」こそが至上であり、考えや宗教、文化が違って、互いに理解し合い、認め合うことが大切だと考えています。もちろん独裁政権は無しで、革命も起きないごく平穏な日常が世界にありふれることが幸せで、僕の考える平和です。しかし今回の講演会で、革命が一概に悪いことだとは言えないのだと思わせられ、さらに僕の思う平和は薄いのだと

実感しました。世界には多くの貧困民が苦しんでいて、日々食糧問題に悩まされています。彼らに幸せをもたらすのは、豊かな国であり、我々日本がよりよい援助をしなければ彼らの生活は一向に良くなりません。トイレや学校などの文化を伝え、教育を与えることが我々に求められていることだと思います。先日、ノーベル平和賞を受賞したパキスタンのマララさんが望み続けた教育は、まさに難民や貧困民のニーズであり、生の現地の状況を表す言葉だと考えます。彼女のような人間がたくさんいるという事実は、豊かな国を含めた世界全体が考えるべき重大な問題です。最近NHKの9時台のある番組で「武器輸出3原則」が「武器装備移転3原則」へ改まったことについて細かく報道していました。日本は平和を憲法第9条で現しています。それがパキスタンやパレスチナ、その他戦争当事国へ武器のパーツを輸出しているため、戦争に荷担しているのではないかと見られています。しかもそれらの部品を海外に輸出する際は、その辿り着く先は企業や工業には知らされないと言います。これは非常に大変な問題であり、日本が人を殺すための道具の1部になっていることは恐ろしく良いとは言えません。日本が平和を創るためには、他にもっと方法があると思います。良い悪いの区別は難しいけれど、“人を殺すこと”は世界のどこへ行っても、どの宗教でも文化でも同じで、共通認識として悪いと思われていると考えます。とても考えさせられる新たな見方ができる講演が聴けて良かったです。(国際教養科3年)



いくつか初めての新しい視点で社会を見ることができた。一つはグローバル経済の持つ闇の部分。国がどんどん貧しくなっていく。ダイヤの密輸が一部の現地人によって許され、国の経済が崩れていってしまう。密輸された商品と知らず私達が購入することで紛争に加担してしまうことは、どうすれば解決できるのか。2つめに、国際協力の裏側。政府がやるべきことをせず、困っている国民を放って、

《講演後、先生に質問に何う生徒達》 自分は密輸への協力によって得た金で生活。これには衝撃を受けた。現地人、現地の政府、全員が平和に向かっているから、海外から援助がきているのかと思えば、全く違った。意識は変えることができないのか。伊勢崎さんの行った活動は素晴らしいと思った。現地の生活を変え、伝統を変え、健康へと導いている。そんな力を持った人々がもっと平和を広めていって欲しいと思う。革命の最後の話の内容はとても印象に残っている。若者が残酷さを競う。子供が巻き込まれる。私はそんなことなど全く知らなかった。人を殺すことに全く抵

抗がない、むしろ自発的にファッションとして暴力を振るう。そんな過去を持った人間が大人になって、平和な環境を創造するのは困難だと思う。伊勢崎さんが小学校のカリキュラムに「人権教育」



を取り入れたと聞いたとき、子供の純粋な思考などが大人の事情で壊されてしまったことを思い、悲しみや怒りを感じた。メディアに対しても同じことを感じた。人々を洗脳し、虐殺へと導く。100回同じ嘘を聞けば真実と信じてしまう。1日や2日では直せない思考を変え、一生取り戻せない命を奪わせてしまう。映像も衝撃的だったが、それらが正義だと信じ、行った国民の行動にも驚いた。結局、やはり民主主義による国民の意思が一番強いというか、影響することを感じた。日本のヘイトスピーチ。これは初めて知った。映像で見たメッセージは、これは本当に日本で書かれたものなのか信じるができなかった。それぞれ意識が暴力へと向かってしまう。エスカレートしてしまう。止めるものは個々の意識にあり、集団の関係の中にあり、国家間にあると思う。自分を見つめる心、相手を尊重し、正しい判断、冷静な判断で行動を抑止することが大切だと思う。今日は外国の状況から自国の意識の変化、国際関係の裏側まで様々な視点で見ることができた。伊勢崎さんが体験したことなど、とてもたくさんのことを高校生に伝えたいこととして私達に話して下さい、ありがとうございました。(普通科1年)

信州大学教育学部との高大連携授業 10/22(水)

本校の卒業生でいらっしゃる大先輩の信州大学教育学部 小池浩子先生に本校にお越しいただき、国際教養科2年生を対象に授業を行っていただきました。授業のテーマは、「真の国際人に求められる要件」で、10年以上にわたって、本校国際教養科に授業に来ていただいています。今回は、異なる角度から見た異文化理解について、ご教示いただきました。



〈誤解を防ぐための低コンテキスト〉

「高コンテキストな社会」というのは言葉でコミュニケーションを取らずとも“空気を読むこと”で理解し合える社会のことを指し、逆に「低コンテキストな社会」とは言葉によるコミュニケーションで成立する社会のことを指すそうだ。そういう視点は今までの私にはなく、非常に新鮮であった。反面私は「一般的に言語学での言語の第一特徴として「言語は嘘をつく」という話を思い出していた。何かわかりやすい記号に置き換えている以上、表現には現実とのずれがあるというのだ。誤解を防ぐための低コンテキストというけれど、低コンテキストが誤解を招くこともあるのではないかと感じた。(国際教養科2年)